市長あいさつ

下野市長　広瀬寿雄

今年は、広島・長崎の原爆投下から７０年という節目の年です。

原爆投下後、「75 年間は草木も生えない」と言われた「ヒロシマ」は、この７０年の間にめざましい復興を遂げました。一方、被爆者をはじめ、戦争を知る世代は年々少なくなってきており、子どもたちが戦争や原爆について知る機会が減ってきているのではないかと感じています。

こういった状況の中、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さ、生命の尊厳を若い世代に語り継いでいくことは、我々にとって重要な責務であると考えています。

下野市は、核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現を願い、平成１８年６月１６日に「非核平和都市宣言」を行いました。また、世界でただ一つの被爆国の国民として、戦争や原爆の記憶を風化させることのないよう、平和行政の推進に取り組んでいます。

中学生平和研修派遣事業は、非核平和都市宣言の推進及び平和学習活動の一環として、市内４中学校から生徒を広島に派遣するもので、第２回目の派遣となる今年は、壬生町との合同派遣となりました。

生徒たちは各学校の代表として、そして下野市の代表として平和記念式典へ参列するとともに、各学校の全校生徒が戦争の犠牲になられた方々のご冥福と平和を祈り折った千羽鶴を「原爆の子の像」に奉納しました。

また、広島平和記念資料館、原爆ドーム、原爆死没者慰霊碑などの見学、被爆体験講話の受講、灯ろう流しを体験し、その中で生徒自身の「目」、「耳」そして「心」で感じ、「平和の尊さ」、「生命の尊厳」、「平和を愛する心」を学び、恒久平和への理解と認識を高めていただいたことと思います。

今後は各中学校の文化祭等において報告会を実施し、広島で感じたこと、学んできたことを生徒たちに伝え、共有するとともに、さらに次の世代へ伝えていってもらえるものと期待しています。

最後に、本事業にご参加いただきました生徒及びその保護者の方々、また、事業実施に向けてご協力いただきました多くの方々に心から御礼申し上げます。

派遣団団長報告

平和のために語り継ぐこと

下野市中学生平和研修派遣団団長　上野　保久

このたび第２回下野市中学生平和研修派遣団の団長として、中学生を引率してまいりました。今回は、壬生町と合同でありましたので、下野市４中学校から２人ずつ８人、壬生町２中学校から２人ずつ４人、合わせて１２人の中学生が派遣団員となりました。中学生の皆さんは、自分が見聞き、実感したことを、多くの人に伝えるという、いわば使命感にも似た意識で参加してくれました。私は、今回の研修のテーマは『実感』であると考え、事前研修を始め、行く先々でそれを語りかけようと考えました。

修学旅行で訪れる京都を過ぎて、広島まではかなり遠くまで来た感じがしました。広島駅に到着して、まず、その街の大きさに驚きました。ここがかつて７０年は草木一本も生えないだろうと言われた街であろうかと、事前研修時に学んだ復興のシンボル「１００m道路」を眺めました。路面電車でホテルへ。そこで、被爆体験講話を受講しました。１７歳の時に被爆した竹岡智佐子さんのお話でした。爆心地付近の陸軍病院の看護婦をしていた母を助けに向かいますが、陸軍病院は壊滅状態。母の特徴の金歯を探して、死体がぎっしりと浮かぶ川を、一体一体確認しながら泳ぎ渡ったそうです。１７歳の少女が、川にも陸にも横たわるおびただしい数の死体の口をこじ開けて、金歯の確認をして回ったのだそうです。そのような想像を絶する状況下で竹岡さんは「誰がこんな戦争をした。許さんぞ。アメリカも悪い。日本も悪い。」と思ったそうです。そして、「こんな思いを世界の誰にもさせてはならない。原子爆弾も絶対使ってはならない。その事をアメリカに行って訴える。」と、戦後アメリカに渡って講演活動をしたそうです。本当に７０年前の強烈な出来事を知ることができました。

竹岡さんの講話が頭から離れぬうちに、広島平和記念資料館の見学をしました。そこで、更に悲惨さの実感が持てました。象徴的な原爆ドームも強く印象に焼き付きました。

２日目は、テレビでしか見ることがなかった広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式に参加し、黙祷を捧げながら、かつての広島を思い、その悲しみを実感しました。夜には、慰霊を弔うために「灯ろう流し」にも参加しました。

３日目は、２歳で被爆して９年後になくなった佐々木貞子さんの死をきっかけに、原爆で亡くなった子どもたちの霊を慰め平和を築くための『原爆の子』像に、千羽鶴を奉納しました。団員の皆さんは、各校の生徒が心を込めて折った鶴を代表で届けに来ましたと、祈りながらつるしました。飾り付ける場所がないほどの膨大な千羽鶴を見て、日本全国民の平和への願いを実感したと思います。

今回の研修は、明確な目的を持って行われました。また、若い世代がともに学

び、語り継ぐことの大切さを知り、そして、友情をはぐくむことができたという点でも、大変有意義であったと思います。

３日間、団員の中学生は、みな広島の状況を真剣に視察し、考え、下野市の代表にふさわしく立派に行動しておりましたことを、改めましてご報告いたします。

最後に、平和研修派遣事業を興し、こういう機会を与えてくださった市当局の皆様に心から感謝申し上げます。

派遣団員報告

平和研修をとおして

南河内中学校　二年　早川　颯太

今回の広島への平和研修派遣は実に充実した三日間でした。今こうして当たり前に毎日生活できることの幸せを素直に感謝できる心になりました。

いつもテレビで見る美しい広島の町並みや近代的な建物から、原爆が本当に投下されたとは想像できませんでした。今年は戦後七十年と聞き、七十年も前なのか、七十年しか経っていないのか、という不思議な気持ちになりました。そこで、実際に広島に行き、自分自身で戦争という事実を確認し、平和について考えてみたいという思いが強くなりました。そんな私の気持ちを整理してくれた貴重な研修でした。

一番印象に残ったことは、研修初日に伺った被爆者の方の体験談です。被爆当時十七歳だったと聞いて、今の私とあまり変わらないことにまずどきっとしました。やけどで皮膚が焼けただれたり、けが人の手当をしたり、けがをしたお母さんの手術も麻酔なしで、獣医さんが手がけたりしたそうです。まさに「生き地獄」だったという言葉が頭から離れませんでした。実際にお話に出てきたことが次に訪問した原爆資料館に展示されており、聞いたことが映像となって頭の中をまわっているようで怖くなりました。極限の状況で冷静に判断し行動することが、今の私にできるだろうかと不安にもなりました。これがまさに「生き地獄」なのだと思いました。

また、二日目の平和式典に参列しました。ここに集まる人々の多さや、戦時中戦ったアメリカ人やロシア人も大勢参列していることに驚きと同時に少しほっとしました。そして三日目に原爆の子の像に、全校生で折った鶴を奉納しました。奉納するスペースを見つけるのに迷うほどたくさんの鶴であふれていました。戦争や平和に関心をもっている人がこんなにいることを表しているようでした。

今回の派遣研修で学んだことは、あきらめなければなんでもできるということです。広島は最後までがんばって立て直そうとした人々の気持ちに答えるように木々も生え、見事に復興してきました。二つめは、日本は原爆によって甚大な被害を受けました。世の中に核兵器がある限り同じ被害を起こす可能性があります。決して同じ体験をする人々があってはいけないのです。戦争は二度としてはいけないし、核兵器をこの世からなくすことです。三つめは、新しい仲間との出会いです。過去の現実を受け止める時、恐怖感や落ち込むことがありました。しかし、共に学ぶ仲間がいてくれたことが何より心強かったです。

今後戦争体験者がいなくなってしまう時代がきても、戦争の恐ろしさ・残虐さを自分の口で伝えていきたいです。今ある暮らしが平和であることを認識して、当たり前と思うのではなく、当たり前の生活のありがたさに感謝しながら。

二〇一五年広島

南河内中学校　二年　臼井　亜美

私は南河内中学校の生徒代表に選ばれ、平和研修派遣団の一員として、八月五日～七日広島に行きました。当日までは期待の反面、不安もありました。でも出発の日の朝、校長先生が「臼井さんは肌が真っ黒に焼けるほどテニスをがんばり鍛えているから大丈夫だよ」と声をかけてくださいました。私はその一声で元気になり、栃木を出発しました。

栃木から広島へ向かう新幹線の中では、他校の生徒とトランプやしりとりをするなどして、すぐに打ち解けることができました。しかしこの後、いよいよ原爆の恐ろしさを感じることになります。

私達はホテルに着き、被爆者の方から話を聞きました。メモを取っていた私の手は、恐ろしさで震えが止まらなくなりました。話を聞いているうちに、私自身が原爆の恐ろしさを体験したような感覚になりました。私の中で一生記憶に残る体験だと思います。

また広島平和記念資料館を見学し、原爆ドームにも行きました。そこには、焼けただれた人の皮膚など、想像を絶する資料が沢山あり恐怖に陥りました。

二日目の宮島では海がとてもきれいで感動しました。また奈良にしか鹿はいないと思っていたのですが、宮島にも沢山の鹿がいたので、とても驚きました。夜は灯ろう流しを体験しました。川一面に灯りが見え、その様子は満天の星空のようでとてもきれいでした。

今回の平和研修では、色々な体験をさせて頂きましたが、一番感動的だったことは八月六日に行われた平和記念式典に参加できたことです。一分間の黙祷の時は、戦争の悲劇、恐ろしさが頭の中に浮かび胸が痛みました。

また広島市長さんは平和宣言の中で、戦争のない平和な世界でいられるようにと訴えていました。私の心に残る言葉でした。

私はこの平和研修に参加できたことで戦争の恐ろしさ、平和の尊さについて、たくさんのことを学ぶことができました。また貴重な体験をさせて頂けたと思います。日本にも、七十年前、戦争があったという事実を自分の目や耳で確認することができました。そして二度と戦争が起きてはいけないという思いがとても強くなりました。今後、戦争のない平和な世界が実現できるように祈り続けていきたいです。

僕の平和宣言

南河内第二中学校　二年　瀬川　源

この広島派遣の３日間は、私にとって心に残る体験となりました。貴重な経験、新しい学びや発見、そして同じ体験を共にした仲間も増えました。それらを通して、私は今回の派遣で、２つの大きなことを学びました。

まず１つ目は、何と言っても戦争の悲惨さです。派遣前にもそれは十分に認識していたつもりでした。小学生の時から、『はだしのゲン』を何度も読んでいましたし、他にも戦争の本やテレビ番組に触れる機会はたくさんありました。しかしそれらは、文字や映像の中の事でしかなく、自分が想像していた以上に、戦争は残酷なものだということを、この体験で知りました。そのことを強く感じたのは、被爆者の方の講話です。その女性は当時のことを生々しく語ってくださいました。ひとつひとつの話が心の痛むものばかりでした。話を聞いているとき、悲しみと同時に怒りや疑問などが浮かびました。なぜ戦争が起きるのでしょうか？なぜ、人は戦争を起こすのでしょうか？理由は様々だと思いますが、どんな理由であれ、ぜったいに戦争をしてはいけない、と改めて思いました。

さらに資料館を見学して、原爆投下後の悲惨な光景を知りました。痛々しい写真の数々は、目を覆いたくなるようなものばかりでした。原爆とは、本当に恐ろしいものです。落とされた原爆の近くにいた人は、跡形もなく焼けました。爆心地から少し離れたところにいた人達は皮膚がドロドロにただれ、垂れ下がった皮膚を引き摺らないと歩けませんでした。そして、原爆ドームの近くにある元安川は、水面が見えないぐらいに、死人ややけどを負った人達で一杯だったそうです。

そして２つ目は、今自分が生活している環境の有り難さです。男の人は、戦争に行きたくなくても強制的に兵士にさせられました。ご飯を満足に食べられず、お腹をすかせていた人達がたくさんいました。大切な家族を亡くした人が数多くいました。勉強したくても、働かなければいけない子供達ばかりでした。皆、その日その日を生きていくのに必死でした。しかし、朝起きて安全に登校し、勉強して給食を食べ、部活で汗を流す。この普通の日常を送ることが、どれだけ夢のような事なのか。普段から感謝の気持ちをもって、生活していくべきだと強く思いました。

今後、戦争を起こさないために私たちにできることは、今回の平和研修派遣団で学んだことを、自分だけのものにするのではなく、１人でも多くの人に、学んだことを伝えていくことだと思います。それが、広島に派遣させていただいた恩返しでもあります。これから、自分に与えられた使命をしっかりと果たし、この世の中から核兵器や戦争をなくす、世界平和のごく小さな手助けになりたいと思います。

私の決意

南河内第二中学校　二年　町田　陽香

私は今回の平和研修派遣団に参加させて頂きました。そして私たち若い世代が知らなければいけないことを知ることができました。

それは、私たちの平和が戦争の上にあるということです。私はつい最近まで平和な日本しか知らずに生活してきました。知らなくていいと思っていたからです。でも今回派遣団に参加させていただき、その考えが変わりました。

その理由として、被爆者の講話を聞いたことがあります。講話をしてくださった方は、１７歳の時に被爆されていてとても鮮明に被爆体験を話してくださいました。急にピカーンと周りが眩しくなったこと。自分自身から血が出ていたこと。立ち上がると、皮が垂れ下がっている人やくぎやガラスが体に刺さっている人がたくさんいたこと。川は死体だらけで水が全く見えないような状況だったこと。お母さんの目玉がぶら下がっていたこと。その目玉を取り出すための手術を麻酔もせずに行ったのでお母さんが暴れて叫んでいたこと。私は、あまりに具体的ですごく怖くなりました。特に、お母さんの目玉がぶら下がっていたというのを聞いて、自分の母親がそうなっていたらと考えると、怖くて、恐ろしくてたまりませんでした。また、これが本当の話であることも感じて今がどれだけ平和で、どれだけ平和であることが幸せなのかが分かりました。

講話をしてくださった人は最後に、

「戦争のない国、みんなが幸せになり、人として生きられる世界を作ってほしいと心から願っています。」

とおっしゃっていました。私は、そんな世界を作るためにも、戦争のことを知り、沢山の人に聞いたことを伝え、これからを考えていこうと決めました。

その他にも、平和記念式典に参列させていただいたことが理由として挙げられます。式典ではたくさんのことを考えさせられ、決意するきっかけになりました。その中でも一番考えたことは、『平和と戦争・喜びと悲しみ』です。

なぜなら、子供代表による平和への誓いを聞いたからです。誓いの中にこんな一文がありました。

『事実を、被爆者の思いや願いを過去・現在・未来へと私たちの平和への思いと共につないでいく。』

この一文を聞いて、私は平和によってもたらされる幸せだけでなく、戦争によってもたらされた悲しみも、必ず未来につないでいかなければならないと考えました。

私は今回、平和研修派遣団として参加させていただき、ある決意を固めました。それは平和をつないで、幸せを増やすことです。戦争は、悲しみをもたらします。でも、戦争をなくせば悲しみが減るのと同時に、幸せが増えるのです。メリットしかないのです。私は戦争と平和について沢山の人に伝え、知ってもらい必ず平和と幸せを増やしていきます。

ヒロシマから得たもの

石橋中学校　二年　大田和晃聖

「昔、広島で戦争があった。」、「核爆弾を落とされた」。以前の僕には、七十年前の悲劇を、そうやって漠然としか考えられなかったでしょう。しかし、広島に行ったことで、そのような考え方は一変しました。

被爆者の方から講話をいただく機会がありました。女学生の頃に被爆された竹岡さんは、母親を探して、焼け野原となった広島を彷徨ったそうです。また、元安川が膨れあがった遺体で埋め尽くされていて、僅かに見えた水面は、血で赤く染まっていたそうです。竹岡さんは家に戻り、生き延びるために野草を採っていました。母親が子を庇う体勢で亡くなった親子を見て、戦争を恨んだといいます。このとき竹岡さんは、「アメリカに行って、この様を見せつけてやろう。戦争がいかに愚かであるかを、全世界に伝えよう。」と決意したそうです。僕はこの講話を聞いて、思わず鳥肌が立ってしまいました。

平和記念資料館では、ケロイド状の手足を引きずる人々やキノコ雲の写真、爆風や熱風で破壊され、ゆがめられた塀や仏像、壁に残った人の影や放射性物質を含む「黒い雨」など、そのすべてが僕に無常を感じさせました。

平和記念式典では、大変暑い中、日本人だけではなく、たくさんの外国の方が参列していたこと、そして彼らが平和への思いを語っていたことに驚き、また感動しました。夏の盛りの猛暑の中にもかかわらず、参列者みんながまっすぐな目で真剣に、厳かな雰囲気で式に臨むことができたと思いました。

夜に行われた灯籠流しは、かつて水を求めて果てていった人たちの慰霊をするために、爆心地からすぐの元安川に灯籠を流しました。僕は灯籠に「恒久平和」と書き、平和を祈りました。

平和公園の原爆の子の像に、学校で作った千羽鶴を奉納しました。この原爆の子の像は二歳のときに被爆し、十二年後に原爆症で亡くなった佐々木禎子さんのために全国の学校からの寄付により建てられた像です。彼女が生前、「千羽折ると病気が治る」と信じて折り続けた折り鶴も、平和記念資料館に展示されています。今回、僕たちが奉納した千羽鶴は、禎子さんの慰霊のための千羽鶴です。

今回の下野市・壬生町中学生平和研修派遣事業は、非核宣言都市である下野市だからこそ実現できたと思います。僕は、目で見て耳で聞き、そして体で感じた広島のすべてを、世界に向けて広く発信していきたいと思いました。

教育長の池澤さんがおっしゃった、「ヒロシマを知ることは、未来を知ること」というお言葉の意味が、ようやくわかりました。戦争がどれだけ愚かで、どれだけ野蛮であるか、これは政治家だけではなく、すべての人々が考えなければならない大きなテーマです。一人一人が自分の心に平和の種をまけるといいと思います。

広島を訪れて

石橋中学校　二年　大根田　絢奈

戦後七十年の時を経て、今は平和な日本です。初めて行った広島は高層ビルが多く建ち並ぶ都会的なところでした。本当に原爆が投下されたところとは思えない場所で、驚きました。

私は戦争についてよく知らないので、戦争とはどのようなものなのか、また、原爆投下による被害について知ることを目標にして、しっかり学んでくることができました。

広島で初めて原爆について触れた、被害者の方からの講話。あまりの生々しさに鳥肌が立ちました。人間が苦しんでいることを想像するだけで恐ろしいのに、それが実際に川で大勢の人が死んでいたとか、やけどの人でいっぱいだったということが現実にあったとは考えられません。核兵器はたくさんの人に悲しみをもたらし、多くの人の命や人の未来までを奪ってしまう、恐ろしいものだということを知りました。

平和記念資料館では、原爆投下が本当にあったことを実感させられました。中でも一番衝撃的だったことは、肌が焼けただれている人のモデルです。それを見て私は涙が出そうになりました。もう人ではなくなっていて怖かったです。そんな人たちがたくさんいたと考えるとぞっとします。記録を残すための写真を撮ることがとてもつらかったです。

式典への参加では、こんなにもの大勢の人が平和を願っているのに、なぜ戦争が始まってしまったのか不思議に思いました。子供代表による平和への誓い。私たちには、被爆者の思いや願いを平和への思いとともにつないでいく役目があることを強く感じさせられました。平和とは何か、考えさせられる式典でした。

「七十五年間は草木も生えない」と言われ続けた広島に咲いたキョウチクトウ。この花は、原爆投下の年の秋に咲きました。花を見たとき、なんだかほっとしました。この花が希望や生きる勇気を与えてくれたから、今の広島があるのかなと思いました。

今回、私が広島に行くことを知った多くの友達が、式典や戦争についてのテレビを見てくれたそうです。今までの自分は、戦争と向き合うのが怖くて避けていた部分もありましたが、このような出来事をしっかりと受け止め知ることが大切だと強く思いました。原爆ドームが私にそれを「無言の証人」として教えてくれました。広島を知ることで、戦争に対する怖さより、「もっと知らなくては」という考え方に変わりました。これからは、学習してきたこと、実感してきたことを学校、地域に伝えること、また、将来、次世代につないでいくことに努めていきます。

平和研修派遣団として広島に行って

国分寺中学校　　二年　山田　翔也

私は、今回平和研修派遣団として、広島で、多くのことを学び、考え、感じました。

初日は、６時間弱新幹線に乗って、広島に向かいました。

広島について、最初に竹岡智佐子さんの講話を聴きました。竹岡さんの話を聞き、私はすごく恐ろしく思いました。その中でも、「竹岡さんのお母さんの目が飛び出し、それを麻酔なしで切り取った。悲鳴が聞こえた。」という部分。今にも悲鳴が聞こえてきそうで、思わず耳を塞ぎたくなりました。

その後は、原爆記念資料館を見学しました。

竹岡さんの話に出てきた、指に皮膚が垂れ下がった人の模型や、火傷やケロイドの写真、爆風や熱で曲がった鉄扉や鉄骨、焼け焦げた弁当・服・三輪車、それに８時１５分で止まった時計。さっき聞いたものが目の前にあった。それらは、痛々しく、原爆がいかに非人道的かを教えてくれました。

また、いつもテレビや写真でしか見ない原爆ドームを間近で見て、７０年前にここに原爆が落とされたのだと改めて確認することができ、大都市とは思えない自然の多さや、１００m 道路にも驚きました。

翌日の六日、平和式典に参列。広島市長の平和宣言には、すごく共感し、核兵器廃絶と世界恒久平和が実現することを願いました。また、子供代表平和への誓い。私達子供が、今できることが明確になり、私達もやらなければならないと思いました。

そして今回、原爆投下後７０年・戦後７０年という節目の年。記念式典参加国が、過去最多の１００か国には、本当にうれしく思え、世界各国で、原爆についてしっかり考えてくれる機会ではないかと思いました。

夜の灯篭流しでは、灯篭がすごくきれいでした。そして、灯篭の紙が、奉納された千羽鶴からできていると知り、紙だけでも平和の願いが十分に、込められているのではないかと思いました。

そして、最後に各学校の全校生徒が折った千羽鶴奉納。原爆の子の像の下には、日本各地から、そして世界各国からの様々な鶴が、奉納されていました。その鶴の数だけ、平和への願いが込めてあると思うと、私は、ただの鶴ではないと思えました。

また、観光として行った、宮島・厳島神社や、広島城も、原爆で亡くなった人が流されてきたり、倒壊したりした。広島の観光名所も、戦争、原爆に関わりあった。それらは、他の観光名所に比べ、重みを感じました。

私は、広島から戻ってきた後、祖父の家に行きました。そして、今回の広島の記念式典に出席したことなどを話しました。そして、祖父は戦争のことを話してくれました。

１４年間で初めて祖父から話を聞きました。

祖父は、あまり話したくないのだと言っていました。
私は、それを聞いて、竹岡さんの話を思い出しました。
「戦争したヤツ、ゆるさん。」
戦争はしたものすべてが悪い。だから、戦争そして核は、私は絶対に許さない。そう、心に決めました。そして、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現、そして、忘れないためにも、私は、色々な人に伝えていきたいと思います。

「戦争から学んだ平和」

国分寺中学校　二年　青木　日花

私は今回の派遣事業で初めて広島に行きました。広島は路面電車が走り、多くのビルが建ち並び、たくさんの木々に囲まれていました。その光景を見た瞬間、７０年前の出来事が嘘のように感じました。

ホテルの一室で行われた被爆体験者講話では、その生々しいお話に戦争に対しての考えが変わりました。今までの私は、戦争とは怖く悲しいものと漠然と考えていました。ですが講話を聞いて、被爆の体験を後世に伝えていく事こそが、今の私たちがすべきことなのだと身を持って感じました。体験者の方は、被爆当時母を探すため何十匹も蛆虫がわいている死体や、火傷で顔の形が分からないほど腫れ上がっている死体をかき分け探したそうです。この話を聞いているとき、今の社会とはあまりにかけ離れている事に驚きを感じつつ、私はこんなにも戦争の実態を知らなかったと、現代の私たちが知るべき広島を認識することができました。

その後に見た原爆ドームや資料館には、写真では伝わらない７０年前の広島がそこにあり、リアルな光景に圧倒されました。

６日、原爆が投下された日に行われた平和記念式典には、日本人のみならず外国人の方々まで心を一つにして平和を祈りました。子供代表の誓いでは、「被爆された当時の方々が７０年間広島を生き抜いてきたから、今の私たちがある」と語られていました。これを聞いた時、命の重みを改めて感じました。肉体的にも精神的にも辛い環境下の中、命を繋ぐ。それがどれだけ大変だったか、そう考えると心が痛くなります。しかし、こうした誓いが広島の記憶を未来に繋げている事に感謝し、自分も同じように未来に平和を繋げたいと心から感じました。

夜に行われた灯篭流しでは、「１０年後も１００年後も世界の宝が命であることを願います」と書きました。その川は、当時水を求め亡くなられた多くの人々で、埋めつくされていたそうです。この日に願いを込めた多くの祈りは、未来の平和に繋がると思います。

この派遣事業で学んだ若い世代の私たちが今できる事は、戦争の「本当」を知ることだと思います。死ぬ事の重み、命の大切さ、生きる事の重要性。当たり前だけれども、当たり前が一番大切だと知りました。人と人とが支えあい、励ましあい、協力しあう社会。そんな平和な世界を作るのは私たちです。

「戦争から学んだ平和」これは、戦争という最も恐ろしい体験から、一番大切な物は命だと学んだことです。

戦争は、命を奪う。でもそこから、大切な「平和」を学びました。私は、まだまだ未熟で、この手で世界を平和にすることはできません。しかし、この派遣事業で学んだ事を人に伝えることはできます。今私ができる精一杯の気持ちで伝えていきたいです。